

せり。此の供養として八百藏より飢人二千人へ錢五拾文宛施行せんと、あわ雪と號する茶店の店先にて、飢人共へ施しけり。これ俳優の一奇事といへり。右は天和八年五月の事なりしが、翌九年の六月まで菊川松之助の座本にて興行せしかど、同年七月藩侯より興行をとどめられ、所謂十八軒茶屋を初め芝居小屋をば假の救小屋となし、爰に飢人共をば一時入置かれ、十年に東本願寺掛所再建に付き、定芝居の建物を悉く破毀して、掛所へ寄附しけり。俳優傳記にも、天保九年こんきうの節、笠舞村の御助け小屋前々よりあれど、更に御小屋たち、川上芝居小屋跡、めうぎ芝居小屋跡、天神町、昌安町、淺野町、此の五箇所御助け小屋相建、其後川上芝居御指留に付、小屋は末寺再建の爲め、大芝居を東末寺へ下され、右の材木一向宗の者どもへ御渡しにて、毎日南無阿彌陀佛の拍子にて運送し、誠に賑々敷事也。小芝居の小屋は町屋に相成りたり。と記載す。此の川上定芝居小屋は文政の創建以來實に盛大にして、是がため菊川町邊の者ども營業を得、活計に乏しからざりしが、俄に廢業し、二十餘年繁昌せし定芝居小屋の舞臺の遺跡は明地と成

りて葎生茂り、十八軒茶屋は僅かに残るといへども、破壞して狐狸の住所と成りたり。然るに文久の頃にや、藩政改革の良政に乗じ、寛永の昔に立歸り、歌舞伎再興ありて、川上定芝居小屋の廢跡および犀川川下延命院の尻地に芝居小屋を建築して興行す。然るに川下の芝居小屋は慶應三年に資久寺河原を築出し町地となし、西御影町と名付け、芝居小屋を爰に移す。此と同時に卯辰山を平均して家屋を建て、一時繁昌しけるにより、此の地にも更に芝居小屋を建て興行せしかど、この地衰微しけるにより、淺野川馬場へ移し、于今興行す。卯辰山の芝居小屋建築は明治元年にて、其の遺跡は埋葬地と成りたり。又川上の芝居小屋は明治十二年尾山神社の隣地今の金谷館の地へ移し、此に於て興行せんとせしかど、事故ありて興行を指留められし處、翌十三年西御影町の火災に彼の地の芝居小屋焼亡せり。依りて尾山神社隣地の劇場舍を彼に移せり。是今存在する芝居小屋也。又明治十三年に川上芝居小屋の跡地に更に再建して興行せしかど、土地の都合により、淺野川卯辰八幡町毘沙門の舊社地に移し、これも于今興行す。右の如く維新

以來の劇場舍は所々轉地して、三ヶ所共従前川上の定芝居小屋の如き盛大に至らず。所謂宮芝居のやうにて、建物も甚だ趣相なりといへり。

○中村歌右衛門傳

二代中村歌右衛門は大坂の俳優にして、文政十一年犀川川上芝居座の座本分となれり。續咄隨筆に云ふ。文化十癸酉五月十九日八つ時頃、京都四條川東通り北側雜劇場へ壯士數十人押し込み、亂妨無慙にして數人の見物人騒動せり。其來由を尋ぬるに大坂中村歌右衛門俳名芝翫といへる芝居役者あり。屋號を加賀屋といふ。當世三都隨一の名人なるよし評判甚だしく、今や此の上に出づる者なしとかや。此の歌右衛門が父は、元來加州石川郡宮腰浦の生にして、先年浪華にかせぎに來り、遂に家を卜して大坂の住人と成り、數寄の道とて芝居役者となれりけり。其の子當歌右衛門なるもの生質才氣ありて、芝居の伎藝に勝れ、さきに東都へ下り劇場に出でたるに、大に衆人の譽を得て、三朝一人の號を得たり。文化十年の春は浪華に歸りけるに、江戸の名たゝる輩より我もくと贖物を競ひ、或は錦繪商賣の輩よ

りは錦繪五萬枚を贈り、はたの家よりは黄金許多を贈るなど、財寶巨萬を集め、道中東海道驛々の雲助の輩までも皆其の風をしたひ、名にめで、奔走渴仰する事、諸宗の開山も及ぶべからず。歸後其贖物の棟梁たるを二三十家許板行となして賣払むる者ありけり。實に古今比類なき伎藝漢と云ひつべし。浪華に歸りて名譽彌々甚だしく、俗客兒女子の輩渴仰眷戀、一度是が爲に詞をかはせば、それを悦びて人に誇れり。今年夏に至りて京都に登り、洛外四條橋東北側の芝居にして伎藝をはじむ。依之入口の木戸を堅むる輩も、半ば浪華より來りて是を司るといふ。然るにいかなる事にや、京都にてはさまで勝れし藝とも見えず、聞きしに似ぬなど、初めの程は不評判なりしが、就中十六日より、古手や八郎兵衛といへる切狂言を交へ、態を盡し伎をこらして勤めしかば、大に稱美を得て、流石に今こそ名に聞きし古今獨歩の伎藝なれと、頗に評判の沙汰甚だしく成りしかば、我もくと見物に行く程に、棧敷上下、平座錐を立つべき透もなし云々。又同十三年に大坂道頓堀角の芝居に中村歌右衛門勤めけるに、茶屋等の最負連中より縮緬